

---

# SERENDIPITY ~ガラスの靴を履いたお姫様の恋物語~

佳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

SERENDIPITY ガラスの靴を履いたお姫様の恋物語

### 【NZコード】

N3842M

### 【作者名】

佳

### 【あらすじ】

人気俳優の花岡輝は、偶然乗り込んだ電車で、一人の女性に一目ぼれする。連絡先も聞けぬまま、一人片思いしていたところ、ひょんなことから彼女と会えることに。しかし、その彼女、実は恋に奥手な彼と、恋が苦手な彼女。彼の恋の行方は如何に・・・？

## 始まりは、満員電車にて

シンデレラは、一人お城の舞踏会に行つた時、完璧なメイクに、完璧な髪型、そして完璧なドレスを纏っていた。でも、

靴だけは、脆くて脱げ易いガラスの靴だつた。  
なぜそれだけ、完璧じゃなかつたのか。

その答えが、この二人の出会いに隠れていたりするかもしません。

ガラスの靴を履いて王子様と出会つた理由、知りたくありませんか？

継母と義理の姉達にこき使われていたシンデレラ。

ある日、お城の舞踏大会に招かれるものの、

彼女はドレスも靴も宝石も無く、彼女達と一緒に行く事は出来なかつた。

それでも舞踏大会に行きたかったシンデレラの前に現れたのは、魔法使い。

魔法使いは、シンデレラに魔法を掛け、彼女を美しい姫に、変身させたのだった。

「これ、駄目ですね。動かないですよ」

「うそ・・・。ヤバイよ。後30分以内に到着しなきゃいけないのに

車、車、車の列。

都心の道路は、朝の通勤時間帯、空から見れば、まるでそれは蟻の行列のようだつた。

そして彼らは、その行列の中にいた。

後部座席の男がしきりに腕時計を見る。

何度見たって、時間の進むペースは同じなのにもかかわらず。

「何でこうこう時に寝坊しちゃつたんだ？」

男が頭を抱え込む。

それで渋滞が解消すれば、簡単な話だが。

「・・・仕方ないです。いつなつたら電車で向かってください」

運転席に座る男が溜息と共に呟つと、助手席に置いてある鞄から何かを取り出した。

「サングラスです。これでまあ、何とか現場まで行けると思います。

中央線の神田駅で降りてくださいね。こっちから現場に連絡しておきますから」

黒い眼鏡ケースが手渡された。

彼は急いで中身を取り出すと、それを自分の鞄の中に入ってしまった。

「ありがとうございます。それじゃ現場で」

彼はドアを開けた途端、降り立ったアスファルトを蹴り、近くの地

下鉄へと走り出した。

平日の朝8時、殺人的な混雑を誇る中央線に、新宿駅から乗り込むのは、至難の業である。

特に背が低ければ低いほど、その中での生き残りは困難を極める。

しかし、そんな中、人の海に果敢に飛び込む勇者たちの中に、小さな彼女はいた。

「・・・ふう」

人の波に飲み込まれたかのように電車に押し込まれた後、

彼女は自分の周りを囲む人の中、背伸びをして上空の空気を吸う。自由に身動きができない中、新鮮な空気を吸うには、

これ以外の方法は、座席前での立ち位置を惜しくも逃し、

座席の端にある手摺り近くにしか行けなかつた以上、あり得ない。

身長152cmの彼女は、うつかり外し忘れていたスーツの襟に付けたピンバッジの無事を確かめながら、

目的地への早期到着を祈つていた。

しかし、こういつ時に限つて電車の進みは遅いものである。

特に通勤・通学時間は、電車が遅れるのが常識、ともいえる。

彼女は背伸びをする足に疲労を既に感じていた。

鼻の上にずり落ちて来ていた眼鏡を直そうとするが、

手が周囲の人の体とに挟まつて挙がらない。

一度体勢を立て直そと下を向いた時、彼女の視線は、自分の斜め前に立つ女性を捉えた。

その女性は座席の前に立ち、つり革に掴まつていた。

特に気にも留めず、彼女はもう一度背伸びをしようとしたが、一瞬妙な違和感を覚えた。

何が変だつたのか、確認する為にもう一度その女性の方に目を遣る。

どうやら、様子がおかしい。

その女性は真っ赤な顔をして、体を震わせていたようだった。

時々目をつぶり、体を動かさうとしているが、混雑故に、思ひょうに動けないようである。

体調が悪いのだろうか、声をかけようと、接近を試みる。

体をわずかな隙間の中で捻じ曲げて近づけると、彼女のおかしい様子の原因が分かった。

(・・・この男? !)

女性の臀部に、彼女の背後に立つ男の手があつた。

明らかにそれは、故意に彼女の臀部に置かれ、触れているのである。

(・・・許せない)

怒りのボルテージが一気に上昇する。

正義感が人一倍強い彼女は、無理やり手を上げ、

ついでに眼鏡もあげ直し、体を思い切り捻じ曲げて、

周囲の睨む視線も気にせず、その男の隣に入り込んだ。

男は、特に気に留める様子も無く、その手を女性のスカート下に入れようとしていた時だった。

「ちょっと、今、彼女のスカートに手を入れようとしていましたね」

彼女はその男の手首を掴み、捻り上げた。

男は突然の事に、目を見開いていた。

「貴方の行為は犯罪ですよ。一緒に次の駅で降りなさい。

ほら、あなたも被害者だから、一緒に降りてください」

丁度電車は信濃町の駅を通り過ぎ、「次は、四ツ谷」というアナウンスが聞こえてきた。

周囲がざわつき始める。

彼女は小さいながらも精一杯の力でその男の手を引き、ドア付近へ向かおうとした。

電車が四ツ谷駅に到着した。

プシューといつ音と共に、ドアが一斉に開く。

たくさんの人が、ドアへと流れていった。

彼女は男の手を離さないよう、しつかり掴んだまま、駅のホームに降り立った。

混雑からの解放故か、一瞬だけふうと気が抜ける。

その時。

「・・・はなせ！」

そう聞こえた瞬間、何かの衝突音と共に顔に大きな衝撃を感じた。一瞬何が起こったのか分からぬまま、彼女はそのまま後ろに倒れこんだ。

「・・・！？」

男は、彼女の顔を空いていた方の手で殴り、逃走を図ったのだ。

周りが騒然とする。

彼女は混乱したが、よろけながら立ち上がり、大声で叫ぶ。

「待ちなさい！誰か！その男を捕まえて！」

彼女の叫び声と同時に、誰かの声が聞こえた。

「おい！待て！」

背の高い誰かが、男の後を追いかけていた。

その人は、人ごみを掻き分け、その男に覆い被さるように後ろからぶつかって行つた。

男はよろけてその場に倒れる。

彼女はようやく落ち着きを取り戻し、被害者の女性と一人の下へと走つた。

「大丈夫ですか？」

誰かが呼んだのだろう、何人かの駅員が駆け寄り、

その男を制止しつつ、その一人が彼女の右頬にある痣を見て、尋ねた。

「ええ、私は平氣です。とにかく警察を呼んでください」

彼らはとうとう駅務室へと向かつ事になつた。

## 秋霜烈日な貴女と

「はい。すみません。そういう事なので、遅刻します。

・・・ええ。・・・それでは、失礼します」

彼女は駅務室のドア付近にいた。携帯を切り、駅員に渡された食品用の冷却剤を頬に当てた。

「・・・いたあ・・・」

幸い、口の中は切れていなかつた。

しかし右頬には大きな青い円がしつかり出来上がつていた。

「・・・大丈夫・・・ですか?」

恐る恐る、椅子に座つていた被害者の女性が尋ねてきた。

「え?ああ、気にしないで。これ、勲章つてやつじゃない?」

彼女は笑つて答えた。

女性は安心したように、小さなため息をついていた。

男は別室で先ほど到着した警察から事情を聞かれていた様だつた。

彼らは男が連行された後の事情聴取の為、しばらく駅務室で待機することになつたのである。

隣を見ると、先ほど男を追いかけた人が、

椅子に座りながらもそわそわした様子で仕切りに腕時計を見ているが、

携帯でどこかに電話した様子はなかつた。

「・・・あなた、どこかに向かつ途中じゃないのですか？」

もう季節は秋なのに、大きなサングラスをかけている。

髪はぼかぼかしているが、肩より少し短くて、柔らかそうだった。

Tシャツの上にジャケット一枚、ジーパンといつづりつな格好をしている。

肌は色白く、線の細い感じで、一瞬女性のように見えたが、

背の高さや肩幅から、男性のようだつた。

「え？あ、ああ。なんですが、携帯を忘れてしまって・・・」

口からは意外と低めの渋い声が聞こえてきた。

「それじゃ、私の使います？」

「い、いえ。それが、先方の電話番号も携帯に入っているものだから、分からんんですよ」

彼が苦笑いをする・・・よう見えた。

目が見えないため、口で判断するしかないが。

「そう。それじゃ、仕方ないですわ」

彼女は携帯を鞄にしまい、隣に座つた。

すると、向かいに座つていた女性が、再び恐る恐る、しかし今度は彼に尋ねた。

「あの・・・もしかして・・・花岡輝さんじやありませんか？」

「え？ 2人とも知り合いでですか？」

彼女が素っ頓狂な声をあげる。

「・・・やっぱり分かりますか。サングラスだけじゃ」

男が参つたな、といわんばかりの表情をした・・・よつて見えた。

「似てるな、と思つてたんですが・・・。信じられない！私、ファンなんです」

女性が嬉しそうに言つ。

彼はサングラスを取り、鞄からメガネケースを取り出し、そこにしました。

「・・・あの、知り合いなんですか？」

彼女は女性に聞いた。

彼女は驚いたように応えた。

「知らないんですか？あの花岡さんですよ？」

「……『あの』って……私、知り合いで花岡という人は……」

「

彼女は馬鹿にされたような気がして、少しだけム、とした。

「彼は今超人気の俳優ですよ。」

今花岡さんが主演されている映画が歴代の興行記録を塗り替えたつて、

連日テレビでも報じられているじゃないですか。

花岡さんは一枚目で、高学歴だけど、それを鼻にかけず、性格がとつても優しくて、

それもひょきんな面もあって、本当に素敵な方なんです！

最近は鈴木派と花岡派で別れていって、私はどっちかといったら花岡派なんです。

でも、色黒でワイルドな鈴木さんも捨てがたいですよねー！」

選挙の街頭演説でもしたいのか、と彼女は突っ込みたくなった。

「・・・テレビはほとんど見ないので、存じ上げません」

彼女はバツが悪そうに、花岡、と呼ばれた男に軽く頭を下げる。

彼は少し驚いたようだったが、微笑んで彼女に言った。

「いえ。お気になさらずに。」

他人ですから、知らないで当たり前です。僕は偶然他の人より知られているってだけですから

「・・・すみません、被害者の女性の方だけ、こちらに来て頂けますか」

部屋のドアが開き、警察官が入ってきた。

女性は急いで鞄を持ち、出入り口へと向かう。

「花岡さん、頑張つてくださいね。」

応援しますから！御二人とも、ありがとうございました！」

そう言って彼女は部屋を出て行った。

「あの・・・」

「はい?」

少しの沈黙の後、花岡が彼女に話し掛けってきた。

「貴方、勇気ありますね。男性でも怖いのに、女性なら、もっと怖いでしょう?」

「いえ。私は怖くなんかないませんよ。ただ、許せないだけです。」

目の前で犯罪が行われているのに、私は怒りを感じた、だから捕まえただけに過ぎません」

「・・・そうですか」

再び、沈黙が落とされる。

そしてまた、花岡がその沈黙を破った。

「その胸のピンバッジ、格好良いですね。会社のか何かですか?」

彼が彼女のピンバッジを見て言った。

特に気にかかつた訳でもなかつたが、他の話題が見付からなかつたからだつた。

「これですか？・・・まあ、そんなものです」

彼女は眼鏡の紺色のフレームをくい、と上げ、自分の胸のピンパッジを見つめた。

「・・・秋霜烈日とこゝおず」

「え？ しゅう・・・れい・・・？」

「『しうりんわうれいじ』です。」

秋に降る霜や、夏の激しい日差しのように、仕事に対して厳かである」と。

当たり前のようすで、難しいです。

私の『会社』は、『社員』にそつあるように、このバッジをつたせることです

彼女は、何かを考え込むかのようにそのバッジを見入っていた。

彼はその様子をただ、黙つて見ていた。

「・・・すみません、女性の方、来ていただけますか？」

先ほどの警察官が再び部屋に来た。

彼女は立ち上がり、彼に向かつて行つた。

「逮捕に協力してくださつてありがとうございます。それ

貴方無しではあのを捕まえる事は出来なかつたと思います。それ  
では」

彼女は彼に微笑みかけ、颯爽とその場を立ち去つて行つた。

「あ・・・名前、聞いてない・・・」

彼は一人残された部屋で、ぽつりとそう呟いた。

幸せの鼻歌、衝撃の真実バージョンで。

彼女が会場に到着すると、

皆が彼女に釘付けになつた。

「こんな美しいお姫様は、どこから来たのだろうか」

その噂は、王子の耳にも入る事に。

でも、誰もそれが、自分達と世界が違う人だとは気がつかなかつた。  
。

彼はパートカーの後部座席に座つていた。

「あ、あその二交差点を右に曲がつてください」

「了解しました」

数分の事情聴取の後、彼はパトカーで撮影現場まで送られていた。

「あの・・・。遅刻しておられますか・・・大丈夫ですか？」

助手席の警官が尋ねてきた。

「ああ。心配しないで。しょうがないことだったんだから」

彼は満面の笑みで答えた。

それを見た警官は安心したように呟いた。

「よかつた・・・。

といひで、花岡さん、先ほどから歌われている歌は、何の歌ですか  
？」

「え？僕、歌なんか歌つてる？」

「ええ、パトカーに乗った時からずっと鼻歌を・・・」

彼には全くの自覚がなかったようだ。

驚いたように自分の口に手を当てる。

しかし、直ぐにその手を離し、にこり、と笑いかけた。

警察官がその笑顔を見て、同性ではあるがどきりとしてしまったの

は言つまでもない。

「僕、どうやら嬉しい事があると、無意識に鼻歌を歌う癖があるそ  
うなんです。」

友人によく言われます

「嬉しい事？」

その警察官が怪訝そうな表情を見せる。

無理もない。

先ほどまで痴漢の事件で関係者として事情聴取されていたのだから。

「ええ、本当、素敵だつたな・・・」

彼はうつとりしたように、窓の外を眺め、再び鼻歌を歌いだした。

「花岡さん…どうされたんですか？」

パトカーで町の外れにある空き地に着くと、

彼の到着を待ちわびていた数名が駆け寄ってきた。

「花岡さんは、電車内での痴漢の逮捕に協力されたため、遅くなりました。」

逮捕の御協力に、警察からも感謝いたします

一緒にいた警察官が、近くの人にはうやうやしく説明した。

「え？ そうなんですか。いやあ。参りましたよ。

花岡さんのマネージャーは道路が混雑しているから

花岡さんは電車で向かってゐつて、中々来られないし。携帯は留守電だし」

髭を生やした小太りの男が笑った。

「監督。すみませんでした」

彼は頭を下げた。

その男は、はは、と軽快に笑った。

「何、そういう事なら謝る必要は無い。」

さ、君のシーンの撮影に取り掛かろう。

今は鈴木君のシーンを撮影しているから、その間に衣装とメイク、  
済ませちゃって」

彼らは小走りで自らの持ち場へと戻つて行つた。

「・・・よつ、輝。お前、痴漢捕まえて格好良かつたんだつて?」

「勇哉か。撮影は?」

「今終わつた。やつと休憩だよ、休憩」

台本の最終チェックをしていると、控え場所の簡易テントに鈴木が

訪れてきた。

「で？逮捕の協力はどうでしたか？花岡さん」

鈴木が茶化すように彼の肩の上に手を乗せる。

「いや、別に……。ただ……。」

「……ただ、何だ？」

「ううん。何でもないよ」

彼は花岡が座っていた椅子の前にあるテーブルに腰掛けた。

「つたぐ。ちょっと愚痴言わせようよ。

お前が来ないし、おまけに連絡はつかないし、現場は大変だったんだ。

監督は怒鳴るから雰囲気悪くて。今夜おじれよ

鈴木が隣の椅子に座り、そばにあったコーヒーを勝手に飲み干す。

「あはは。参ったな。でも、連絡つかないのはいつもの事でしょう？」

僕、携帯あんまり見ないし

彼は笑いながら台本を開じた。

「つたく、それでも持つてるなら出ひよな？」

「あ、実は・・・」

花岡が済まなそうな顔で舌を小さく出す。

「お前まさか・・・」

「忘れちゃったんだ」

がつくりとうな垂れるような姿勢で、鈴木は頭を下げた。

「お前は～～～携帯電話を不携帯でどうするんだ?ー」

「えへへ・・・。だつて・・・」

「だつてじゃねえ! 今度忘れたら承知しねえぞ?」

鈴木はポケットからタバコを取り出し、ライターで火を付けた。

そして口にくわえ、思い切り息を吸う。

「・・・ところで、お前、熟語得意だったよな

くゆる煙に田がかすむ。

同じく俳優の鈴木勇哉は、花岡と高校と大学が同じだった。

高校では挨拶を交わす程度の仲でしかなかつたが、

大学で同じ演劇サークルに入り、

更には就職といつ道を蹴り、奇遇にも同じ世界に挑んだ仲間として、

一番の仲が良い、いわば親友同士であった。

「あ？まあ、得意というか、人よりは知ってるよ」

鈴木はポケット灰皿を胸ポケットから取り出した。

「……『秋霜烈日』って知ってるか？」

「しゅうりやく…………ああ。知ってるよ」

彼は身を乗り出した。

鈴木が怪訝そうな顔で花岡を見る。

「……でも何で突然そんな事を聞くんだ？」

「……大体お前がこいつ風に、突然脈絡の無い事を聞くのって……」

「お前……」

「い、いいじゃん、別に」

にやり、と鈴木は整った唇の上に笑いを載せた。

「顔に書いてあるで。好きな女の子がそう言つてました、てな」

「ち、違うーす、好きなんかじゃなくて、気になるだけ……」

あ、と彼は慌てて口を両手で抑えたが、時は既に遅し。

こんがりと日焼けした長い腕が、花岡の肩に乗せられた。

「こつも本当に正直で、お兄さんは困るよ、全く。さ、話してご覧なさい」

彼は顔を真っ赤にして、俯いた。

「・・・彼女が胸に付けたピンバッジを見ながら、それの意味だ、  
て言つてたんだ」

「・・・え？」

鈴木が驚いたような顔をする。

「お前、それがどういう意味か、分かるか？」

「・・・え？ 秋に降る霜のように、夏の激しい日差しのよう、厳  
かである・・・

とか言つてたけど？」

はあ、と大きなため息を付いて、鈴木は言った。

「もう一つ、他の意味がある。それはな・・・」

ぼそり、と鈴木が呟いた。

そのテントが崩れるほどに大きな声が撮影現場に響き渡り、監督が怒鳴り込んで来たのは、間もなくの事であった。

## 運命の囁み合わせ。

「で、何でその女性を好きになつたんだ?」

夜は更け、月の光が一番輝きを増す頃、二人は花岡のマンションの部屋にいた。

「うーん。別に、顔が好みとか、そういう訳じゃないんだよね・・・。

化粧つけは無いし、髪も僕と同じくらいの長さなんだ」

彼女の容姿を話している内に口が緩んできている花岡を尻目に、

鈴木は左手で持っていた缶ビールを口につけ、その中のビールを喉に流し込む。

「まあ、お前は面食いじゃないのは知ってるよ。昔からそりだしな。

ただ、出会つたばかりの人を好きになるなんて、お前にしては珍しいな、って思つてさ」

花岡の手には、缶ボトルから注いだカクテルの入ったグラスが握られていた。

濃いオレンジ色に染まるグラスをじっと見つめる。

「何て言ひのかな・・・。衝撃、だつたんだよ。彼女の・・・」

痴漢を捕まえた時の彼女の顔。

そして電車から降りようとした時、手を離さないよう必死になっていた時の姿。

本当は自分も、痴漢の斜め後ろに立っていたから、痴漢の行為には、薄々気が付いていた。

でも、声をかける事は、なお躊躇われた。

自分の心の中であれこれ言い訳して、捕まえる勇気がなかつた。

それなのに、あの人は、あの小さな体を捻じ曲げても、目の前を悪に、立ち向かっていた。

それは、彼に眩暈に似た何かを、感じさせた。

いや、何か硬いもので殴られたような衝撃、みたいなものだつたかもしだれない。

でも、どうやってこれを言葉にすれば良いのか、彼にはその術を見付ける事はできなかつた。

そして、心臓が飛び跳ねる音。

自分でもこの感覚には経験がある。

これは、『恋』だ。

「また、会えば分かるよ。彼女の良さは

彼は自然に生まれてくる笑いを隠すように、グラスを顔の前で傾け、その中身を飲み干した。

「・・・お前、相変わらず恋愛に関しては偏差値低いなあ

ビール缶をテーブルに置かれ、鈴木の手がおつまみの柿ピーへと伸びた。

「名前すら知らない人間に、どうもいつ一回会つて言つんだよ？」

「・・・あ」

今度は、その手があたりめへと伸びる。

「それに、彼女『秋霜烈日』なんだろ？」

どう考へても、俺たちや周りに縁があるような人間じゃないよな。

もう絶望的だな。少しは勉強しろよな。

つたく、今まで俺がどれだけ女の子との関係を取り持つてやつただよ・・・。

それなのにいつも・・・

マヨネーズがたっぷりついたそれは、鈴木の口へと運ばれた。

「・・・あ～～～～！～！」

花岡は空っぽになつたグラスをテーブルに乱暴に置いた後、額をテーブルに叩きつけた。

「おい、ビールこぼれたじゃねえか。あ、それに柿ピーのカスが・・・」

鈴木が柿ピーを足で部屋の隅に蹴り寄せた事は、

その数日後、彼が部屋の掃除をする時に初めて気がつくのだった。

窓に吊るされた青色のカーテンの隙間から、

東の窓から起きた太陽の眩しさで田を覚ます。

・・・全く、付いてなさ過ぎる。

田を覚ました瞬間、昨日の記憶と自分の不甲斐無さを想い出し、

思わず呆れ、大きく溜息を付いてしまって。

ああいう女性を、探していたんだ。

自分の周りの同業者にはいない、ああいう、女性。

それなのに、それなのに・・・。

拳銃の果てには勇哉に怒られる始末。

やれ、名前ぐらい聞け、やれ、それだからいつまでたっても彼女ができるない、やら。

ブー、ブー。

枕元に目覚まし代わりに置いていた携帯電話のバイブレーションが部屋中に響く。

無視しようと布団をかぶるが、そのしぶとさに、彼はといつ根を上げた。

「・・・もしもし。」

寝起き特有のゆっくりした低い声で、彼は答えた。

しかも今日はそこに不機嫌といつ要素が絡まり、余計に感じが悪い聞こえだつた。

昨日、鈴木と自棄酒をして、朝の3時頃まで飲み続けたのである。

それもこれも、あの痴漢のせいだ。

あいつがあんな事しなければ、僕は彼女に会わずに済んで、こんな気持ちにならずに・・・。

ああ、でも、出会えたことを後悔したくもないような・・・。

微妙な気持ちと思に出したくない昨日の記憶が蘇ってきて、彼はかなりイライラしていた。

「もしもし、花岡さん。僕です。今日の午後の撮影はキャンセルになりました」

朝7時、それはマネージャーからの電話だった。

「・・・何で?」

不機嫌さがますます加速する。

「東京地検から電話がありまして、昨日の痴漢の件で任意の取調べがあるみたいです。」

ですから、そちらの方に行つて下さい。昼頃マンションにお迎えにあがりますから」

「・・・え?」

眠気が一気に吹つ飛んでいく。

「それ、誰からの電話でしたか?」

「えへと、女性だつたと思います。確か・・・って、花岡さん?もしもし?もしもし?」

彼は先ほどまでベッドで丸まっていた人間とは思えないほどに急いで起き上がり、

支度を始めた。

念入りに顔を洗い、タンスの奥にしまってあった、

特別の時にしか着ないスーツを取り出し、

そして9時頃、彼は足早に近所の美容室へと走つて行つた。

「・・・花岡さん、地検に行くのに、どうしてそんなこじりかりした格好を？」

「それも髪型も綺麗にされているみたいですが・・・」

マネージャーが、メガネを上手で直しながら、当然の質問をする。

隣で新品の黒いスーツを着こなした秀麗な青年が答えた。

「当たり前じゃないですか！検察厅に行くんだですから！」

「・・・でも、取調べだし、それに花岡さんはただの目撃者ですか  
ら・・・。」

普段も「ひこう風にしてくれれば良いの」と・・・

最後のほうはマネージャーの愚痴で終わっていたが、彼は特に気にするところも無く、

鼻歌を歌いながら、目的地へと向かっていた。

「お待たせしました。花岡さん」

通された部屋で暫く待つていると、待ち望んでいた声が聞こえてきた。

振り向くと、そこには顔に大きなガーゼを張った、黒のパンツスリーツの女性の姿があった。

「先日はお世話になりました」

そう彼女は言つと、机の上にネームプレートを置き、椅子に座つた。

隣には、もう一人、彼女より比較的大柄の中年女性が座つていた。

「自己紹介が遅れました。

私は検事の川上飛鳥です。こちらは検察事務官の田邊さんです。

よろしくお願いします

パソコンを前にした大柄な女性が頭を下げる。

彼もそれに応じて頭を下げた。

紺色のフレームに囲まれた眼鏡の奥に潜む瞳に、彼女の強さを再び感じる。

「いえ、じぢぢーん。まさか、貴女が検事さんだなんて・・・」

「すみません。あの時きちんと申し上げなくて」

彼女の胸に、あの時見たピンバッジが光る。

中央部の円を囲むよつこ突き刺さる霜。

『秋霜烈日』と呼ばれるそれは、検察官の象徴をも意味する。

そう、鈴木が教えてくれた。

彼はもう一度、あの時彼女が言つた言葉を思い出した。

「秋霜烈日、まさにその通りですね」

「はい?」

何かの書類に目を通していた顔を、彼女が上げた。

「いえ、僕はあまり検察官のお仕事は詳しくありません。

しかし、川上さんを見ると、秋霜烈日の意味を実感します」

「・・・光榮です」

彼女はにこりともせず、自分の前にある書類を再び見るために視線を落とした。

彼はすこしそわそわしながら、もう一度彼女に問い合わせを投げか掛ける。

「それで、今日は何の・・・？」

思わぬ再会の嬉しさで顔が緩みそうになるが、

仕事をする彼女の凜とした様子に、彼も背中を叩かれたよつた気がした。

背はかなり低いはず。

それなのに、どうしてこんなに大きく見えるんだろう、彼は不思議に感じた。

「説明が遅れました。

先日の痴漢の事件、逮捕に協力をしてくださったあなたの証言を調書に取つておき、

公判で証拠として提出させていただきたいのです。

その為、多忙だと思いますが、ご協力を、と思いまして

短めの髪は、彼と同じ位、もしくは彼より短いだろうか。

しかし、前髪の長さは、彼女のほうが勝っていた。

「いえいえ！ いつでも大丈夫です。俳優なんて仕事は、そんな忙しいものでは……」

「こんな台詞、マネージャーが聞いたら怒られるな、そう彼は思った。

「それじゃ、始めますね。では一応確認ということで、お名前は……」

かちやかちや、とキー・ボードが2度叩かれる音が聞こえた。

「……以上です。ありがとうございました」

気がつけば、既に夕方の5時になっていた。

「恐らくこれで貴方はもう私達に会わなくて済みますよ」

彼女がふふ、と笑い、何かを書き取っていた。

少し冷えた、しかしどこか寂しそうな笑い声だつた。

「何で、そんな事をおっしゃるのですか？」

自分の名を署名して、押印し終わって、彼女にその調書を返す。

「はい？」

彼女が顔を上げた。

隣でパソコンを打つていた事務官も驚いたように、彼を見た。

そこには、冷静といふものと、困惑が入り混じったものがあった。

「・・・僕はいつだつて協力します。

川上さん、平井さん、されれば、いつでも、仕事を放り投げてでも、協力しますから」

きょとん、とした様子で彼女は彼を見つめていた。

しかし、しづらぐすると、彼女は少し表情を緩めて、言った。

「・・・花岡さん、貴方、面白い方ですね。

確かにあの女性が言つていたように、ひょいきんな所もあるのかし

「ひ

「いや、ふやけてなんていません！」

彼は必死になり、自らのひふじを振り上げて叫ぶよつこ言つた。

一方、彼女は冷静なまま、椅子に座り直した。

「普通の人はね、こういう事、嫌がられるんです。

時間は掛かるし、何のメリットにもならない。

だから、いづ言えば、安心するかな、と思いましてね」

「何を言つてるんですか！貴方の仕事は凄いものですよ！」

罪を罰する権力を任されているんでしょう？

そんな方に協力を要請されて、むしろ喜ぶべきですよ！」

彼女は呆気に取られたように、彼を見つめていたが、次第にその表情に笑顔が咲いた。

「そう言つてくださいと、私たちも勇気付けられます。ね、田邊さん

「ええ。人気俳優つていばつてたり性格が悪いと思っていましたけど、違うんですね」

中年の女性が、嬉しそうに言つた。

「あら、人気だつて知つていらしたのですか？」

意外だ、といわんばかりの表情で、田邊の方を見る。

「ええ。娘が大ファンでしてね。

部屋中彼のポスター一杯で、掃除する度に会っていますから。

川上さんぐらいですよ。

花岡輝さんを知らなかつたのは

ははは、と部屋に笑いが響いた。

田邊と呼ばれた女性はパソコンの電源を切る準備をしていた。

「この事件の日、出勤された後、川上さん、私に聞いたんですよ。

『花岡輝って誰?』てね。

この支部の方、皆で驚いてしまつて。

私、見ましたよ、映画。凄い感動しちやつた。あれ、上演延長なん  
でしょ?」

「ええ。お蔭様で。あじがとうござります

彼は軽く会釈した。

「あら、私も映画ぐらい見ますよ。ただ、最近は忙しかつたから見  
てないだけです」

彼女が拗ねたように呟く。

その様子がまるで子供の様で、可愛らしく見えた。



成功は失敗の積み重ね、・・・のはず。

「川上さん」

仕事帰り、二人は駅まで一緒に帰る事が多かった。

「何ですか？」

「川上さんって、彼氏いる？」

「・・・何ですか、突然」

明らかに狼狽した様子の彼女に、田邊が笑つた。

「やだ、そんなに慌てなくても」

「あ、慌ててなんか」

「川上さんって、27歳だつけ？」

秋も中盤。

太陽は既に西の空に沈みかけている。

行き交う人は、足早に家路を急ぐ。

「そうですけど」

彼女は常に冷静沈着だった。

「ううん。 ただね、今日の花岡さんも27歳で同じ年だし、

結構ああいう感じの人とか、お似合いだなって思つて」

田邊が、悪戯っ子のような笑いを浮かべる。

「何をおっしゃりたいのですか」

いつも増して鋭い声で、返答が帰ってくる。

しかし、長い付き合いの彼女には分かっていた。

「いいえ、別に」

それが、彼女が動搖している証拠だという事に。

田邊は少し飛鳥の前を歩き始めた。

そのステップは、体格から想像できないほどに軽いものだった。

突然、軽快な電子音が鳴り響いた。

「あら、娘からだわ」

田邊が急いで持っていたハンドバッグを荒らし始める。

「もしもししつん・・・」

彼女は、そんな田邊の後ろ姿をぼんやりと眺めながら歩いていた。

「・・・芸能人に恋するような年でもな『いつて言ひのこ』

彼女は着ているジャケット襟を立て、吹き付けてくる風の冷たさに思わず首を竦めた。

頬の上のガーゼに手を置き、擦る。

昨日の殴られた痛みが、少しだけぶり返してきた。

「・・・そもそも、彼氏なんて今の私には邪魔な存在にしかならないわ

「・・・で？」

酔いで赤らんだ顔で、鈴木が顔を近づけてくる。

「え？」

出鱈目な鼻歌を歌いながら、幸せな笑いではちきれそうな花岡の顔が、そこにはあつた。

「『え?』じえねえよ。」

名前も聞けて、会話も盛り上がって、3人で一緒に出口まで行ったんだろ？

それで、帰り際、メアドを交換したり会つ約束をしたりしたのかつて聞いてんの」

そこには花岡のマンションの部屋だった。

鈴木と花岡の二人は缶ビールとおつまみ数種類を手に、2日連続の飲み会を開催していた。

しかし、今日は昨日とは違った趣のものであったが。

花岡は鼻歌を止め、裂きイカを手にして、口に呑みながら呟いた。

「・・・してない」

鈴木が口に含んでいたビールを噴出しそうになり、

急いで傍に置かれていたティッシュで口を拭いた。

「お前えーこの脳みそには恋愛の「れ」の字も無いのか?何で肝心な時にいつもそなんだよー!ー」

彼が怒ってビール缶を持った手をテーブルにたたき付けた。

突然の彼の怒りに、花岡は戸惑った。

「そ、そんな。だつて無理だよ。あんな状況でなんて……」

あまりのイラつきに、彼が自分の頭をぐしゃぐしゃ、と搔き廻る。

「ああ。何でお前って何時まで経っても奥手なんだよ。

大学の時からもむけなんだもんなあ……。

ほら、サークルで一緒にた……名前忘れたけどさあ。

何とかちゃん。一つ下の。

あれだつても、俺が頑張つて

お前の為に色々ダブルデータをセッティングしてやつたりしたのこ、

お前が煮え切らない態度取るから、部長に結局取られたんじやん。

それに、Iの前はアイドルの・・・何とかちゃん。

名前忘れたけど。

あれだつて、俺がさあ、せつかく携帯の番号」とメアドを・・・

「あ————.—.世の傷を癒い返すなよ————.—.」

花岡は両手で耳を抑え、顔を勢いよく横に振る。

鈴木は頃垂れたように下を向き、手を裂きイカの袋に伸ばす。

「わ、分かつたよ、今度は……」

「こつも同じ事言つてゐるよなあ」

彼が新しい缶ビールの栓を開けた。

「う・・・。でも、次は絶対に誘う!

これは運命だ！

彼女と僕は、出合つべくして出合つたんだ。

だから、もし今度会つた時は、絶対に「飯に・・・・・！」

「おつ会わずに済むつて言われたんだろう?」

2枚目がつワイルドと呼ばれている男が裂きイカを口にこなぱこ呑  
えている姿は、

あまりにも滑稽で見ものではあるが、

今の彼にとつてはそれ所ではなかつた。

「・・・・あ、ああーーーー！」

花岡は、まるでかの如画、ムンクの『びのじ』へ、両手で頬を抑えながら叫んだ。

「つたべ。もう黙田じゅん。

今日はせっかくのチャンスだったのに。

だからこつも女を逃すんだよ。

今日は何の為の飲み会なんだよ。

昨日は白棄酒、今日は祝杯じゃねえのか？

これじゃ、ただの反省会用の白棄酒だつつの

ぐい、と先ほどふたを開けたばかりの缶ビールを飲み干して、鈴木  
は立ち上がった。

「悪い。今日はもう帰る。

明日午前中に口ケあるんだ。お前は・・・明日は休みか

テーブルの上で上半身を野垂れている花岡を尻目に、

彼はしつかりした足取りで玄関へと向かった。

「おこ。ちやんと締つしとけよ」

「・・・ふあい

花岡の生返事に首を傾げながらも、彼は花岡の家を後にした。

## 1%の本音と、99%の後悔（1）

シンティレラは、はにかみながらも、王子の手を取った。

そして、ダンスフロアーへと一人は進む。

美しい音楽が、演奏者によつて奏でられ始めた。

「・・・うるさいなあ」

ルルル、ルルル、ルルル。先ほどから家の固形電話がしきりに鳴いている。

「・・・ああ、分かつたからー。」

さすがに2日連続の飲みは拙かったようである。

頭の中で響き渡るのは、切なさではなく、2日酔いの痛み。

途中からではあるが、一人酒は酔いを次の日に持ち込むのはどうも  
確からしい。

「・・・はー、もしもし」

彼は布団から這い出し、ベッドの近くに置いてある子機を取った。

「・・・」

一瞬の沈黙。

「・・・もしもし?」

不機嫌さが猛スピードで加速される。

「・・・あ、もしもし・・・」

小さな声で、血糞の無さげな声は、それ以上語るのを済ませるよ  
うにも思われた。

「……どなたですか？」

後5秒して何も言つてこなければ切らへ、やつ思つていた所だった。

「……検事の川上です。昨日はありがとうございました……」

眠氣と酔いが一気に吹つ飛び。

これは夢か、彼は自分自身に問い合わせてみる。

「……あ、お、お、おはようございます。」

か、川上さんで、いらっしゃいましたか。あはは……」

彼はベッドの上で向時の間にか正座をして、頭をペコペコ下げていた。

信じられない出来事が起つてゐる。

間違いないく、この声は昨日聞いた、彼女の声。

かつてと僕は思っていた、あの。

なんでも気が付かなかつたんだもん。

彼は心の中で先ほどの無礼を侘び続けた。

「あ、あの・・・どうされたんです?」

受話器から彼女の声が聞こえなかつた為、自分から話してみた。

しかし、声が緊張の余り裏返つてしまつ。

「・・・携帯電話、お忘れになられていまわ」

「え? あ。またやつちやつたか

「・・・また?」

「いえ、じつちの話です。そこで、どうしましようか……」

「貴方の事務所の方へ送つて差し上げましょうか」

「あ、いえいえ！・・・あ、そうだ。

自分で取りに参ります。

僕の不注意なのに、そちらに迷惑を掛けるわけには・・・

願つてもないチャンスが舞い込んできた。

恋の神様はまだ、彼を見捨ててはいよいよである。

「・・・着払いであれば、何も問題は・・・」

「いえいえ！手続きも煩雑ですし、それに、家も近いし、

それに僕、今日は休みなんで取りに行きますよ」

彼は慌てて彼女が言う先を制止した。

お願いだ、どうか、彼女にもう一度……。

迷つてこようだが、溜息混じりに彼女が返事をした。

「……分かりました。

但し、私は今日午前で上がりますので、正午まであれば直接お渡しできると思います。

それ以降は事務官に預からせておきますので

「は、はーーー」

彼が背筋をピン、と伸ばす。

一気に体中に回るアルゴールが飛んでいく気がした。

先ほどの小さな溜息は、耳とこいつだ。

「それでは、失礼します」

「失礼します」

彼は壁に向かって頭を下げた後、相手が切る音が聞こえるまで、受話器を耳に当てていた。

我に帰り、受話器を置く。

そしてベタにもほっぺたをつなぐてみる。

思つたとおり、痛かつた。

「・・・やつた！－！－あ、早く着替えなきや。それにシャワーも浴びて・・・」

彼は急いでパジャマを脱ぎ、一番のお気に入りの服を数枚クローゼットから取り出した。

「どれにしようかな・・・」

「・・・ふう

受話器を置くと同時に、大きなため息が口から零れていた。

何故電話などしてしまったのだろう。

後悔の念が彼女を襲いつ。

彼女は朝一番で仕事場に来ていた。

今日は本来非番であったが、

昨日の花岡の調書を完成させる必要があった為、午前中だけの勤務となっていた。

誰もいない自分の部屋の机につけと、

昨日彼が座っていた向かいの椅子の下に、携帯電話が落ちていたのを発見した。

「・・・これ、花岡さんの?」

この部屋に最後に来たのは彼だけだった。

彼女はそれを右手に持ち、後で事務官に配便を手配せよつと思  
い、

それを机の上においた時だた。

『 ただね、今日の花岡さんも27歳で同じ年だし、

結構ああいう感じの人ともお似合いだなって思つて』

昨日の田邊の言葉が、突然脳裏に蘇ってきたのである。

ありありと、鮮明に。

彼女は頭を横に振り、それを払拭しようとした。

しかし。

何故か、益々その言葉が気になつてくるのである。

「・・・別に、私は・・・」

田邊がいる訳でもないのに、言ひ訳らしきものを口にしていた。

自分の手に握られた携帯電話を見る。

黒いボディーに、ストラップの付いていないシンプルな折り畳み式のもの。

電源を入れると、購入時に映る初期画面が出てきた。

「・・・携帯、忘れちやつて」

よく携帯を忘れるし、駅で話した時、そんな事言つてたっけ。

今時そんな人、いない。

痴漢の逮捕に協力出来るほど勇氣があるのに、案外おっちょこちょいで、可愛い所もあるんだ。

心の奥に、ふわりと、暖かい何かが湧き上がる。

彼女は、肩につきそつうな髪を左手で耳に掛け、携帯のディスプレイを眺めていた。

そして、気がつけば彼女は、彼の自宅の電話番号を探していたのだった。

彼の家の電話の呼び出し音が鳴っている間に、我に帰った。

いつもは慎重で冷静な行動を心がけているのに、なんて私らしくない軽率な事を。

駄目だ、こんな事は。

どうかしている。

私は一体どうしたいの？

何を期待して、電話なんかするの？

お願い、出ないで。

そう願つて電話を切らつとした瞬間に、相手の声が聞こえた。

びっくり。

お願い、配で送るよう頼んで。

そう仕向けたはずなのに。

しかし、期待は悉く打ち破られ、正午までに彼と会つ約束をしてしまった。

「めぐなさい、電話は出来心なの。

ちゅうと……多分、ただ魔が差しただけ。

だから、正午には遅れてちゅうだい。

3つ目の願いが叶う事を願い、彼女は携帯電話を傍に置いて仕事に取り掛かる。

そのとき、がひゅ、ヒドアノブをつかむ音がした。

「おはようございます、川上検事。今日はお早いですね~」

がたがたがた、と突如した騒がしい音。

「……どうされたなんですか?」

いつも早めの出勤をする田邊が、きょとんとしてドアの所で立っている。

「な、何でもあつませんよ

「・・・何を今隠されたんです？」

容姿に似合わず、鋭い洞察力を持つ彼女だった。

「・・・あ、氣のせいです」

動揺を隠せないどもりに田邊は苦笑しながらも、飛鳥の隣の机の上に座った。

「あ、早く調書を作成しましょ！」

飛鳥はパソコンの起動音が、心臓の音を消してくれる事を切に祈っていた。

## 1%の本音と、99%の後悔（2）

「川上千尋さん」

正午8分過ぎ、ガードマンが立つ出入口を出た瞬間、

彼女の3つ目の願いは木つ端微塵に打ち砕かれた。

「・・・花岡さん」

ああ、やつぱり来ていた。

あれだけ来ないでって願ったのに。

顔だけ出して、直ぐに中に戻ってしまえば良かつた。

「はい、これですよね」

飛鳥は渋々、黒い革の鞄から、黒く光るボディーの携帯を取り出し

た。

「あ、ありがとうございます」

彼女の手から携帯を受け取り、彼はそれを着ていたジャケットのポケットにしまった。

「それではこれで失礼します」

彼女は足早にその場を離れようとした、その時だった。

「あ、あの・・・。失礼ですが、・・・お、まだ・・・ですよね？」

彼の声が急いで彼女の背を追いかけて来る。

「・・・もし宜しければ、一緒にお食いでも・・・いかがですか？」

正直な彼女にとって、理由が無い以上、絶対に拒むことが出来ない、  
その文句。

「・・・え、ああ、でも・・・」

嘘をつけば良い。

忙しい、これから裁判所へ行く、いくらでも断る嘘はあるのに。

こういつ時に、彼女は自身の馬鹿正直さに腹を立てるのだった。

かくなる上は、彼女がとれる手段は一つ。

彼女は立ち止まり、出来る限り愛想の無い素振りを見せた。

無言によるプレッシャー。

それが、彼女なりの、精一杯の対抗手段。

「よかつた。僕、良い所知ってるんですよ。この前、撮影で行った所で・・・」

しかし、彼はそんな彼女の様子を気にかける様子もなく、

いや、もしかして気が付いていないだけなのかもしれないが、

嬉しそうに彼女の隣に歩み寄る。

大きなため息が口から零れそうになつたが、慌ててそれを飲み込んで。

あ、やつぱり止めとべべきだった。

電話をえしなければ・・・。

後悔とこのつかの津波に飲み込まれそうになつてこの、

それなのに、どうして一緒にいるのだろう。

いじから走って逃げて帰ってしまったが良一。

そうすれば、それで終わり。

もう一度と会つ事はないだら。

そう、そうなの。

彼女は無視しようと思っていたもう一人の自分が、こう言っているのに気が付いていた。

会えなくなるのは、嫌だ、と。

・・・何故？

完全に溺れていはないのは、この手に本音といつも浮き輪を掴んでいるから？

だから、私は必要以上に・・・。

違う、違う、違う。

彼女は急いでその考えを打ち消すために、自らの右頬軽く2度叩いた。

「川上さん、どうされたんです？」

彼が彼女の顔を覗き込む。

「あ、何でも無いです」

彼女が慌てて答えた。

「・・・こういう風に隣に立つてみると、川上さんって、案外小柄でいらっしゃるんですね」

花岡が上から見下ろすよつこにして言った。

「身長、152cmしかありませんから」

「え、そつなんですか？もつと高い印象でした」

彼がにこゝと笑う。

まるで太陽のような眩しい光を放つよつこ。

彼女は思わず口を細めた。

素敵な笑顔。

感嘆のため息をつきそうになる。

そう彼女は思つと同時に、どこかでそれを怖いと感じていた。

笑顔は時に素顔を隠すからだ。

「とにかく、検察官をされてどれくらいになるんですか」

「・・・今年で3年になります」

「そうですか。お仕事、大変じゃないですか」

彼にひとつは、会話のつなぎでしかない質問だった。

「全く大変ではありません」

さつぱりと、彼女はそう言い放った。

突然の彼女の口調の変化に、彼は少し戸惑った。

「あ、そうですか。いや、あまり詳しくないので、知識とか増やそつかなあ、とか思つたり……」

先ほどまで少しづつむき加減だった彼女が、きっと彼に顔を向けた。

そこには、さつきとは違つ、真剣そのものの表情が浮かんでいる。

そしてその視線は、彼の瞳をしつかり掘んでいた。

「検察官には、全ての刑事事件を捜査する権限、そして起訴という重大な権限を任せています。

いくら犯罪の嫌疑がかかっている被疑者、被告人であるとはいえ、捜査をして起訴をするという事は、一歩間違えればその人の基本的  
人権を侵害しかねない、

いえ、侵害行為それ自体なのです。

しかし、私達は真実発見、社会正義の実現という任務故に、

このような強大な権限を任せています。

その権限を公平、適正行使する為には、常に慎重で、且つ自分に厳しくなければならないのです。

まさしく秋霜烈日。

この言葉の示すんとする意味の通りです。

仕事が大変と言つのは怠慢であることの証拠です。

そういう者に検察官と名乗る資格は無いと私は思います「

何時の間にか、彼女は肩で息をしていた。

行き交う人々は、そんな彼女を不思議そうに見ている。

彼は黙つて、彼女の話を聞いていた。

その時、彼の脳裏に思い出されたのは、あの日、電車で見た勇姿。

今も、その時と同じ、キラキラしている彼女がここにいる。

そして一言、呟いた。

「素晴らしいです」

二つの間にか、彼は両手でぱぱぱぱぱぱと拍手を送っていた。

その、「素敵」で輝くような笑顔で。

彼女はそんな彼の一言に、我に帰ったのか、

真っ赤になつて耳を抑えながら下を向いて小走りを始めた。

「あ、川上さん。そちらでは・・・。おーい

手に滅多にかかるない軽い汗をかきながら、彼は彼女の歩調に合わせた。



## 勇気、グラッシャース！（一）

ダンスホールに華麗に舞つ二人。

煌びやかなシャンテリアの下で、樂しい時間は飛ぶよつと過ぎていく。

魔法が解けてしまつ時間が、もつすべりしまつ事にも気が付かず  
に。

沈黙の中にやつと投下された、彼の一言。

「・・・あの、おいしいですか・・・？」

しかし、その投下されたものは、沈黙を破るだけの威力は持っていないかったようである。

しばりへじて、彼女がまつと一晩つぶやく。

「・・ええ」

間髪いれずに、彼の安堵のため息がこぼれあちた。

「よかつた・・・」

卷之三

二人が入った所は、そう遠くない所にある、小さなカフェ仕様のイタリアンレストランだった。

周りは毎時で賑わっている。

その日も、いつものように賑わっていて、店内は騒がしい。

ただほんの一箇所を除いては。

「・・・あの・・・」

「・・・はい?」

「・・・おこしですよな?」

「・・・ええ」

彼がスプーンとフォークを持つ両手の動きを止めた。

「(笑)めんなさい、僕、無理やり誘ひちゃったみたいですね」

彼が済まなさそうな顔をして、俯く。

今更気がついたのか、と突っ込みたくなつたが、彼女は何も答えない  
かった。

ただ、両手の動きを止めただけ。

「・・・はあ。僕、本当駄目な人間なんですね」

大きく溜息をつきながら、水の入ったワイングラスに、彼が手を伸ばす。

しかし、一向にそれに口を付けようとしない。

ただ、右手に持つて、その中の水を回している。

「・・・例えば、ある女性が気になつたとするじゃないですか。

でも、いつも自分から何も言えなくて。

友人に頼つてばかり。それでも失敗するけど。

大学受験も、就職も、自分の意志を貫く事なんかなかつた。

なんとなくやつてみて、気がつけばそこにいるつて感じで。

それはそれで不満とかはないんですね。

でも、やっぱりそれだと空しいし。

しかも、それが恋愛だと、なかなか僕の場合だと通用しないみたいで。

恋愛に関して、何となく、が通用しない。

だから、今度じゃは自分独りでやつてみよつと思つても・・・。

でも、やつぱり駄目なんです。

失敗しちゃうんじゃないかって思つて自分をセーブしたり、  
どこのブレーキ踏むべきなのか、分からなかつたり。

本当、ダメな男ですよ、僕は。自分でやるつとするべ、上手くいか  
ないんだ。

本当、駄目ですよね・・・

彼が悲しそうな顔をして笑う。

透き通るような肌に映るその悲哀の色は、見た事の無こよくな美し  
い色をしていた。

「・・・何で駄目、とか言つたですか」

「・・・はい?」

彼女がフォークとスプーンを両脇に置いた。

近くにあつたグラスにぶつかり、軽い音を立てる。

「ダメとか言って、諦めればそこで終わりなんですよ。

どうして最後まで変わらうと頑張らないんですか？

いつ逆転できるか分からぬのに、ちょっとやつて駄目だつたから  
つて、諦めるなんて。

それはただ、貴方が勇気の無い自分に、言い訳をしているだけじゃ  
ないですか？」

彼の顔の悲哀が消えていく。

代わりそこには、驚嘆が映り始める。

「私は、一度こうしたい、と思つたら、実現するまで諦めません。

だから、司法試験だつて諦めなかつたし、検事になることも諦めな  
かつた」

彼女の真っ直ぐな視線が、彼の胸を貫いた。

「・・・そう、です・・・よね」

彼の顔に笑顔が咲き始めた。

その笑顔に、心ならずも自分の視線が吸い込まれていく事を、彼女は感じていた。

「そうですよね、僕、諦めません。

そっか。

貴女の事好きなんだから、諦める必要なんて、ないんですよね」

「・・・は?」

今度は彼女のほうが驚く番だった。

「僕、川上さんの事を諦めませんから。どうも、僕に勇気をくれて、  
ありがとうございます」

「・・・あの、おっしゃってる事が?」

何度も何度も彼女の瞼が上下に動く。

「だから・・・川上さん、僕」

咳払いを2回、彼が姿勢を正した。

「好きなんです、川上さんの事。

だから、僕の事好きになつてもういえるよつ、頑張りますから

あまりにもあつさつとした突然の言葉に、耳を疑う。

まるで金縛りにあつたように、彼女はしばらくそのままの状態で動かぬまま、

彼の顔を穴の開くぐらうに見つめていた。

「あのー。川上さん？」

彼女の顔の前で右手を振る。

それに気が付いたのか、やつとの事で動き始めた。

しかし、置いたナイフを持つたり置いたりするなど、

あまりにも不自然な動きではあったが。

「え？え、そ、そんな。

わ、私は、あ・・・。

わ、私、よ、用事を思い出しました。

い、行かなきや！…これで、し、失礼します！…」

飛鳥は急いで椅子から立ち上がり、出口に向かった。

膝に掛かっていた白いナフキンが床に落ちたが、気がついていないのか、

そのままびんびん振り向く事無く前進していく。

しかし、再びテーブルに戻ってきた。

「2000円ですよね？ランチセット。これ、私の分です…せ、せよなら…」

どん、とお札が2枚、テーブルの上に叩きつけられた。

食器が軽い衝突音を立てた。

「ちよ、ちよっとー川上さん…」

彼女が全速力で店を走り抜ける。

「あ、ありがとうございました～」

店員の氣の抜けた声が聞こえてきた。

「・・・一万円札2枚も・・・」

置かれた諭吉を手に持ち、彼女に手を振る代わりに、それらをひらひらさせていた。



## 勇気、グラッシャース！（2）

「~~~~~」

彼女は声にならない叫び声を電車のホームで上げていた。

信じられない。

あんな事を言つだなんて。

今日は最悪。

彼に、検察官について訳も分からず捲くし立て、

拳句の果てにレストランで大声を出して、そして逃げてしまつた。

一連の失態、いつもの冷静な彼女であれば、有り得ない。

何故こんなことをしてしまつたのか。

自分の未熟さ？

自分の感情・・・

違う。

断じて違う。

それも、これも、あの人全然悪い。

私は、だつて、凄く悲しそうな顔をして、無理だ、駄目だ、なんて  
言つから、励ましただけ。

あんな言葉は待つてなんかいなかつた。

今度は大きな溜息を付いた。

扉の開いた電車に乗り込む。

ドアよりに設置された長いすの、空いていた端の席に座り込む。

瞼を閉じると、その裏に映つたのは、あの笑顔。

キラキラ星のように輝く、あの匂託のない笑顔。

あの笑顔、良くない。

あんな笑顔、もう見たくない。

絶対に。

本当に体に悪い。

あの笑顔を見ると、一瞬だけだけど、心が熱くなつて、それに、苦しくなる。

隣にある手すりにもたれ掛かった。

頭と肩を、そこに委ねる。

持て余すほどの嫌悪感に、彼女は苛まれた。

知っている。

見ないふりをしている彼女自身が、今どうこう「病気」にかかりそうなのかを。

一度侵されると、そう簡単に、治らない。

彼女は頭を振り、何かを吐き出すかのよつ、大きくため息をついた。

これ以上思考回路を動かしたくはなかった。

動かしてはいけない気がした。

これ以上動かせば、もしかしたら、悪化してしまうかもしれない。

ずっと前に治った筈の。

「・・・ふう」

もう一度大きな溜息を口から零す。

車窓からは毎の都会の喧騒が映り出されていた。

日照りが続いていた日々に、突然振り出した雨。

頭の上で開く傘に叩きつけられる音が、耳障りだった事を、覚えている。

「・・・良いのよ、これで」

心とは裏腹に、次から次へと飛び出してくる言葉たち。

それは、彼を攻撃するためなのだろうか。

それとも、自分自身を守るためだったのだろうか。

「私も、貴方も。これが正解だったんじやないかしら

不思議と、涙は出でこない。

閉まつた門の前、他に誰もいない、真っ暗な夜の中に、街灯の光だけが、彼らを包んでいた。

「本当にごめん。謝つても、謝り切れないけど……」

彼女は左手の薬指にしていた指輪を外し、目の前に立つ男のスーツのポケットに押し込んだ。

「もつたいなかつたわね、これ。彼女には……あげられないが、こんなもの」

口だけが、笑っていた。

雨脚が、どんどん強くなつていいく。

「……さよなら。その人と、幸せにな。私に望めなかつたもの、その人なら叶えてくれる」

彼女は一目散にその場を走り出した。

胸が苦しい。

走っているからなのか、それとも他の何かなのか。

前が良く見えなかつた。

愛用の眼鏡のレンズが雨で濡れているからなのか、それとも、瞳自体が濡れているのか。

どっちでも、良かつた。

どうだつて、良かつた。

ただ、頬は、雨と他の生温かい何かで、濡れていた。

その何かは、よく知つてゐるもの。

気が付いてはいても、気が付いていない振りをしていたかった。

聞こえてくる笛の無い足音に、最後の期待を掛けて、駅へと向かつた。

「次は、吉祥寺。お出口は・・・」

車内アナウンスで、はっと田が覚めた。

到着するまではまだ時間があつたが、思わず急いでその席を立つ。

その瞬間、ズキ、と体のどこかに痛みが走った。

体のどこが痛んだのだろう。

首が、痛かった。

変な姿勢で寝ていたせいなんだろう。

あと、もう一つ。

昔できた古傷が、心の奥で、ずっと昔から上げ続けてきた悲鳴に共鳴していた。

彼女は立ち上がり、ドアの前に立つた。

ガラスに映る自分の顔が、いつもより情けなくて、弱そいで。

あの日の自分は、あの日でサヨナラしたのに。

彼女は右手で頬に張られたガーゼを少しだらした。

青紫に腫れた頬が、ガラス越しに見える。

彼女はそれを、ドアが開くまで見つめていた。

「 鈴哉。おはよー。」

朝 7 時。

撮影現場はいつものように賑やかだった。

「 鈴木勇哉様」と紙が張られた控え室に向かつて、

「一ヒーと煙草を嗜みながら、台本を読んでいる青年が一人、いた。

「 わ、おはよーさん。

・・・あれ? 何か妙に元気だな。さては、あの検事と何か?」

にやり、と鈴木の口が動く。

「 えへへ。まあ、ね」

彼の隣に座り込む。

「僕、変わったから」

突然の花岡の発言に、彼は吸っていた煙草の灰を落としそうになり、慌てて灰皿を手に持つ。

「何だよ、突然」

灰皿に灰が零れ落ちた。

それらがくゆらせる煙が、鼻の先をくすぐる。

「僕、川上さんの事、諦めないからー絶対に」

隣の部屋までに聞こえそうな大きな声で、花岡は言った。

「・・・川上・・・。ああ、あの検事さんね」

彼が灰皿をテーブルの上に置き、煙草を持っていた手を変え、銹え直す。

「・・・で、彼女の電話番号とアドレスは?」

12時を知らせる鐘が鳴つた。

その瞬間、彼女は王子から離れ、突然お城の出口へと走り始める。

王子を後を追つた。

しかし、彼女の姿はもう、見えなくなっていた。

唯一、彼女が履いていたガラスの靴を残して。

王子はそれを手に取ると、いとおしそうに、胸に抱いた。

「あら、電話ですね」

執務室で、電話のベルが鳴り響く。

狭い部屋の為、音量は普通の倍以上に感じられた。

「はい、いらっしゃ……。あら、どうも、先田はありがとうございます」といってました

隣で飛び切りの愛想笑顔と営業用の声で電話対応をしている田邊を  
隣に、

飛鳥は仕事に一つにもまして熱心に取り掛かっていた。

いつも以上に言葉少ない彼女の様子をちらりちらり見ながら、田邊は電話の相手と話し続ける。

「はい、はい・・・。いえ、とんでもない。

・・・え？ああ、はい。おられますよ。少々お待ちくださいね」

田邊が電話の保留ボタンを押した。

「川上検事、お電話です

「誰から?」

彼女は見向きもしないで答えた。

「花岡さんです」

ペンを走らせていた彼女の手が止まった。

しかし、視線はそのまま前に向かつたままだった。

「・・・わ、私は今、仕事で忙しこそお伝えください」

いつも以上に声が甲高くなっている事を、田邊は聞き逃さなかつた。

「その書類、何度目のチェックですか。

かれこれ1時間以上掛かっていますよ。

あとは部長に決裁貰うだけですよね」

バツの悪そうな表情が見えた。

「・・・[冤罪を作り出しても]はいけないからよ。

チェックはしてもし過ぎる」とはないわ

えへん、と咳払いが所在無く響き渡る。

「それ、被疑者が自白している案件ですよね？」

それも現行犯で、田撃者も証拠も揃つているのではありますか？」

「・・・」

ノック・アウト。

試合終了のゴングが聞こえた。

勝者は田邊に決まった。

受話器をぐい、と彼女の前に出す。

「良いじゃないですか。好きと言われた位で、そんなに拒まなくて  
も」

田邊がにやり、と笑みを浮かべる。

「拒んでなんかいません!!私は、ただ・・・」

「はい、保留ボタン押しますからね」

田邊は彼女の胸に受話器を無理やり押し付け、保留ボタンをもう一度押した。

流れていたカルメンのメロディーが止まる。

彼女は大きくため息をつきながら、仕方なく受話器を耳に当たった。

「・・・もしも」

「もしも・・・あの・・・花岡です」

「じういっただく用件で？」

被疑者を取り調べる時よりも冷たい声で、言い放つた。

「先日お画を御一緒した時、川上さん、一万円札を2枚置いていかれましたよね？」

それで、お釣りが一杯あるんですよ。

僕が貰う訳にいかないじゃないので、返したいのですが

彼女は片手で頭を抱えた。

迂闊だった。

ビツツで財布の中のお金が少ないと想つたら。

彼の言う通り。

完全に自分の不注意である。

いやいやいや、彼にも責任がある筈。

何の前触れもなく変な事を言つてくるから。

「ここに送つていただけませんか？着払いで結構ですから。もしくは振込みでも・・・」

「僕、今日、検察庁近くで撮影があるんですね？」

「・・・はい？」

「午後5時過ぎぐらい、終業ですよね？」

その時間に、この前の玄関の所で待つてますから。

良かった、僕も今日は夕方に撮影上がる予定なので

「ちよ、ちよっとーー待ちなさ・・・・・

受話器から聞こえるのは、単調な電子音の連続のみ。

「で?・どいわれるんです?」

にやけた田邊の顔が近づいてくる。

「・・・・け、決裁もらってきますから」

彼女は受話器をそのまま机の上に放ったまま、足早に部屋を出た。

「まつたく・・・・。本当に素直じゃない子なんだから」

彼女はワードの文書を上書き保存しつつ、その背を見送っていた。

時刻は既に、6時近くなっていた。

「・・・川上さん、それから上がりますよ。それは、今日中じや  
なくとも平氣ですよ」

田邊はパソコンのスイッチを切る準備をしていた。

「お先にお帰りください。私はやる事がまだ残っていますので」

いつもは見せないような、無表情な顔だった。

「・・・川上さん」

田邊が大きく溜息を付いた。

「5時に約束されてるのでしょうか？」

優しく諭すよし、説得を試みる。

「・・・一方的にここ渡されただけです」

正直、田邊の心の中はイラつこていた。

もどかしくて仕方ない。

どうしていつも素直になれないのか。

原因は知っている。

でも、もうそれだって「時効」にして良いはずだ。

このままじゃ、せっかく訪れている幸せのチャンスを、逃す」とことなってしまう。

お節介かもしけないけど、それだけは防ぎたい、と田邊は思つてい

た。

「……もひ、良いじやないですか。昔の事は、もひ……」

「お疲れ様でした」

田邊の言葉の上に重ねるよつて、飛鳥が言葉を発する。

彼女は田邊の方を見向きもせず、そのまま視線を机に向けたままだ  
った。

「……分かりました。もし未だ待つてこらよつだつたら、帰るよ  
うに並んでおきます」

田邊は上着を羽織り、鞄を持って、戸口に向かった。

「お先に失礼します」

彼女は軽く会釈をし、部屋を後にした。

窓の外は既に夜の闇に包まれていた。

飛鳥は蛍光灯を付けた。

眩しい位の光に一瞬、目が眩む。

「・・・大丈夫よ・・・。これだけすれば・・・」

彼女は自分に言い聞かせるかのように独り言を呟き、仕事の続きをした。

「お疲れ様です」

夜8時を過ぎると、正門はもう閉まっている。

彼女は夜専用の裏口にいた。

「い」苦勞様です

齢60を過ぎてゐるだらうガードマンに軽く頭を下げ、外に出た。

秋とはいえ、夜は相当冷え込んできている。

彼女はジャケットのボタンを閉め、駅に向かつて歩き出した。

しかし、何かを思い出したかのよつゝ、突然ふ、とその足を止める。

「・・・どうして氣になるのよ・・・」

何度も来た方向や近くの駅の入り口の方を繰り返しあ互に見続けた  
拳句、

苛立つた声で独り言を言いながら、

とつとう彼女は来た方向へ向かつて、再び歩き始めた。

人影が無い事を確認して、そのまま駅へと直行する筈だったのに。

それでも、念の為に来ただけだった。

居るはずないと思っていた。

「あ、貴方つて人は・・・」

「あ、残業お疲れ様です。川上さん」

彼女はその場で立ち止まっていた。

「・・・嘘・・・」

しかし、そこに一人、いたのだった。

彼、花岡輝が、門近くの壁に寄りかかりながら。

夜中にもかかわらずサングラスを掛けて。

彼は彼女の姿を確認すると、小走りで近づいてきた。

そしてジャケットのポケットから封筒を取り出し、中身を確認した。

「田邊さんには、川上さんは仕事で忙しくて来られないから帰れって言っていたんですけど、

この前取調べした部屋の電気、付いてたから、待つてたんですね

彼の笑顔に、嘘はなかつた。

一点の汚れも無い、無垢な笑いを、彼はその白い肌に浮かべていた。

「・・・貴方、何で・・・」

喉から絞り出されたその声は、かすれていた。

秋と言つても、寒いはずなのに。

ずっと同じで、3時間近くも待つていたって言つただらうか。

「何でつて・・・。

言つたじやないですか、ここで待つていろつて。

それに、せつかく貴方にお会い出来る機会なんです。

みすみす逃すわけにはいきませんよ

またあの笑顔を、彼は浮かべる。

街頭に照らされたその笑顔を見る勇気は、彼女にはもう、残っていない  
なかつた。

彼女は突然その封筒をひつたくつた。

「迷惑です！」

静かな街頭に、大声がこだました。

彼女は俯き、両手に握りこぶしを作つて、喚き続ける。

「勝手に私の事好きだとか言つて、勝手に私の事を待つて・・・。

私の気持ちを確認もせず、そういう事をしないで！」

下を向いていた顔が、ぐい、と上がる。

心無しか、彼には、その瞳は濡れているように見えた。

そんな彼女を、暗いサングラスの奥に潜む瞳で見つめていた。

「私は・・・。

私は今そういう事に現を抜かしている暇などありません！

やつとの思いで検事になつて、これからどんどん仕事していかなきゃいけない。

貴方なんかに付き合つてゐる暇なんか微塵も無いんですよ。

私は貴方なんか好きじゃないんですよ！

貴方はただの事件の参考人でしか過ぎないんですよ。

もう、2度と私の前に現れないで下さい……！」

最後の方は、ほとんど叫びに近いようなものだつた。

暗闇に、沈黙がこだまする。

しばらくの沈黙の後、彼は落ち着いた様子で、彼女に微笑みかけた  
ように見えた。

「・・・すみません。

そんなに迷惑になつっていたなんて、思いませんでした。

僕が至らぬ故に、貴女に迷惑をかけていたんですね。

申し訳ありません」

いつも以上に穏やかな声が、彼女の感情を逆なでする。

「もう2度と私の前に現れないで……！」

「…………」めんたい。…………それじゃあ、これで、ちょっとならです

彼はその場で深々とお辞儀をし、そしてその場を去つて行った。

去つていく彼がうつむき加減で、一瞬振り返り、その場で会釈をした時に見えた表情は、

どこか笑っているかのようにも見えた。

彼女はしばらくその場で立ち尽くしていた。

冬の空気を纏つた秋の風が、その場を吹きぬけていく。

一気に踏ん張っていた両足から力が抜けていく。

「…………馬鹿…………私、本当に、最低…………」

彼女はその場にしゃがみ込んだ。

気が付けば頬に貼つたままのシップが濡れている。

瞼が、熱を持っていた。

彼女はそれを両手で強く押さえ込むことしか、出来なかつた。

恋こじ降つていなければ。

今、ここにで呟んでいたのは、数年前の自分。

彼は、彼ではないの。

今は、過去ではないの。

分かつていて、そして、傷つけた。

いや、本当はそういうのかもしれない。

本当は、あの時の彼をそこに見たのではなくて、

叫んだあの言葉は、

砕け散つた勇気が叫ぶ、心の奥底に眠る正直な気持ちなのかもしない。

恐怖。

不安。

一度得たものを、失うことへの。

腕の中に顔をうずめた。

どうしようもないくらいに、涙があふれてくる。

あの時以上に、もっと、もっと、たくさん涙が。

泣き続けるしか、この涙は消せなかつた。



テレビを消し、部屋の電気も消そうとした時だった。

携帯電話からバイブ音がする。

画面に表示された発信者の名前を確認した。

「つたぐ、もつ寝よつとしてるつてこのひ

軽く舌打ちをして、彼は携帯に出了。

「おー、今何時だと思つてこらんだ?..」

思つてきつ怖い声で、すしませよつと考へていた彼だが。

「もしもーしー?勇哉あ?」

携帯電話からは、数時間前まで一緒に仕事をしていた親友の声が聞

じえてきた。

「……お前、何やつてんだ? 明日の朝一番、お前だけのシーン、口ケがあるだろ? がつ……」

壁に掛けられた時計を見る。

短い針は既に2を指そうとしていた。

「えー? 口ケなんかあつたつけー?」

あはは、と高笑いがこだまするよつて聞こえてくる。

「お前……。今外だろ。それも……、相当酔っ払ってんな

か、と聞こえるように拍打する。

「あへへ。ばれちゃつた? ? いやあ、勇哉には隠し事できないよ  
ー」

わやはは、と高笑いをしてこるよつだった。

嫌な予感がした。

花岡が笑い上戸になる時は、よほど飲んだ時以外は有り得ない。

今までがそうだった。

しかし、彼がたくさん飲むといつことせ、あまり無かつた。

ただ、辛い事があつた時を除いては。

今までもこれぐらいに飲んで酔っぱらつた時は、

彼の祖父が「くなつた時ぐらうだつた気がする。

「おー、じつしたんだよ。・・・まさか、あの女検事関連か?」

しばらく沈黙が続くと、今度はまだ、あの高笑いが聞こえてきた。

「あはは~。

何で分かつちやうのかなあ。

もしかしてえ、勇哉つてエスパーだつたり？それとも超能力者？

バラエティの仕事増えるよ～～～。やつたじやあんー・ばんざーい

大声で万歳三唱する声が聞こえる。

彼はもう一度舌を打つた後、ベッドから降りて、

ソファに掛けていた、今日着ていたジーンズを手に取った。

「おー、今どこにいる？

迎えに行つてやるか」

・・・つたぐ、何でそんなになるまで飲んでるんだよ

携帯を顎と肩で抑えながら、彼は着替え始めた。

「・・・僕、頑張ったんだよ・・・」

少しの沈黙の後、突然、小さな声で、本当に消えそうな声で、そつ、聞こえてきた。

「・・・生まれて初めて、自分で頑張りと思えたんだよ。

大学も、役者になつたのも、全部成り行きたつた。

全部成り行きで上手く行つてた。

不満なんて、もちろん一つも無い。

でもね、今回だけは、自分の手で、頑張りたかったんだよ。

本当に、本当に・・・

小さな嗚咽が聞こえる。

一瞬、鈴木は動きを止めた。

しかし、直ぐにシャツを着て、上着を羽織る。

もう一つ、彼には特徴があつた。

本当に悲しい時、酔っぱらつたふりをして、一生懸命ふざけようつと

「あら、じがある、とこ、う」と。

素直に泣けなくて、わざとおどけるところだ。

悲しいぐらこに、精一杯。

まさかとは思うが、これは演技の方だろうか。

「分かった。話は後で一杯聞いてやる。とつあえず、今どこ这儿  
んだ」

「・・・・勇哉の家の近くにある公園。自販機の近く・・・・

「よし。それは都合が良い・・・ん?」

電話の向こう側から、彼以外の声が聞こえてきた。

それまでは聞こえていなかつたが、どうやら複数人の声である。

「おこ、誰かと一緒にいるのか?」

返事は無い。

代わりにその複数の人間の声が聞こえてくるだけである。

「もしもし、もしもし？」

何人かの笑い声がした。

しかし、肝心な花岡の声は聞こえない。

「おい、返事しろ！」

その瞬間、何か、鈍い音が聞こえた。

それはまるで、金属が硬い物にぶつかった瞬間に出すそれに似ていた。

そして、笑い声に搔き消されそう、小さくなづめき声。

あまりの突然のことではあるが、聞こえてくる音だけで、

見えないはずの情景が見えるよつた錯覚に陥る。

背中に悪寒が走った。

「おい！輝！おい！」

ぶつ。ツー、ツー。

電話が無情にも切れた音。

体中の血の流れが、逆行していく。

「輝！…！」

鈴木は鍵もかけぬまま、一目散に部屋を飛び出していた。



## To be honest～正直なキモチ～（1）

ガラスの靴の持ち主を探すため、ありとあらゆる手段を施しても見つからなかつた。

それでも諦め切れなかつた王子は、町中の女性にガラスの靴を履かせた。

そして、やつと、ある一人の女性が、その靴を履く事ができた。

しかし、その彼女は、光る宝石も、豪華なドレスも着ていない、

ボロボロのみすぼりしい格好をした、女性だつた。

「・・・おはようござりこまわ」

扉が恐る恐る、びっくり箱をあけるかのよつこ、開いた。

「おはようござりこまわ」

田邊は、ちらり、と川上の方を見た。

いつもと同じ姿で、仕事机に向かっていた。

「川上さん、あの、昨日・・・」

おれのおれ、田邊がそう言い掛けた時だった。

ドアのノックオンと共に、隣の部屋の事務官が入って來た。

「失礼します。

先ほど、警察から連絡があつて、

今朝の明け方、傷害の現行犯で逮捕された被疑者が数名送致されて

くふうなんです。

それで、飛び入りで申し訳ありませんがその内の1人の取調べをお願いできなかと

「分かりました。それで、いつ頃ですか？」

彼女はいつもと変わらない冷静な態度で答えた。

「そんなに時間はかかりません。

あと20分ぐらいで到着するそ�です。

あ、これ、弁護と供述調書なんで」

その事務官が、田邊に手渡した。

田邊がわざと目を通す。

「はい、分かりました。ありがとうございます」

ばたん、ドアがしまった。

「現行犯なら楽勝ですね。

要は被害者の怪我の具合ね。起訴するかどうかは。

物取りなら強盗致傷でいくけど

まだ調書を見てはいないが、大体相場はつくものである。

彼女は椅子に腰かけ、仕事の準備に取り掛かった。

「そうですねえ。

あら、結構傷害重いみたいですよ。

左足骨折、頭部打撲。

弁護とつた段階でこれじゃあ、致死になる可能性もあつるか・・・  
も・・・」

田邊が相槌を打つた、その瞬間だった。

ペン回しをしていた指からペンが床に落ち、軽い衝突音を奏でた。

「川上さん…」

同時に、青ざめた表情の彼女の声が、最大のボリューム音で鼓膜を震わせる。

「な、何ですか突然。そんな大声出さなくとも聞こえますから…。

」

「川上！被害者の名前！職業！読んで！」

ばん、と彼女の机の上に調書が叩きつけられた。

彼女が指差す部分を口に出してみる。

「氏名、花岡…輝…。職業…はい、ゆ…う…。」

「これ、花岡さんですよー。」

ぞくつと背筋が凍る。

飛鳥の目の前の景色が、瞬時に霧の様に真っ白になっていく。

ただ、昨日の彼との残像が、頭の中で点滅しているだけだった。

「えーっと、調書によると、

今日の明け方、被疑者とその友人が公園を通りかかったところ、自販機前に座り込んでいた花岡さんを見つけ、彼の頭や手足を金属バットで強打し、

財布や時計を取ろうとして、腕や頭に全治・・・、あれ、か、川上さん！ びこくー！」

「ばん！」と扉が壁にぶつかる音がした。

彼女は、上着だけを手に、部屋を飛び出していた。

「か、川上さん！ 被疑者がもう直ぐ来ちゃうのに・・・。あ〜〜〜、もう〜〜！」

田邊が隣の執務室へと向かつた。

「すみません！ ちょっと、急なんですけど・・・」

先ほどの事務官を掘まえ、調書を押し付ける。

「え？」

「被害者、川上検事の友達なんです。

だから、今病院に行つてきて、ついでに証言も取つてきます

田邊が体格からは想像出来ない様なスピードで走り出す。

「え？ だつて今朝ワideonショーで被害者はあの俳優の花岡だつて。

現行犯だから、証言は・・・。つてちょ、ちよつとーー！」

時既に遅し。

彼女達の姿は米粒程になつていた。



## To be honest～正直なキモチ～（1）

「川上検事！」

病院に向かった歩道を全速力で走っていると、隣に黄色いタクシーがその車体を近付けてきた。

「乗つて！病院まで送りますから」

窓からは田邊の顔が覗いていた。

彼女は足を止め、車の中に転がり込んだ。

「中央病院まで、急いでください」

田邊が運転手に念を押す。

あいよ、という声と共に、一人の体は座席に張り付いた。

「・・・大丈夫ですか？」

上下に大きく揺れる肩に、田邊が手を添える。

「私、昨日、彼に酷い事言つたの・・・」

田邊は彼女の手を両手で握つた。

それは氷の様に冷たく、しつとりと湿つっていた。

彼女の声は、次第に泣き声へと変わつていいく。

「昨日、私が帰るまで待つていてくれていて・・・。

本当は・・・、う、嬉しかったの・・・。

でも、でも、でも・・・。

昔、あの人も、そういう風に、私を……。

だから、思い出して、私、迷惑だとか、そういう事を……」

田邊が両腕で彼女を抱きしめた。

「 もう、恥こんですよ、昔の事に縛られなくて。

素直でこころを、自分に許してあげてください。」

田邊が優しく、飛鳥の頭を撫でた。

「 田邊さん……。

私、本当に馬鹿だから……。

いつも、やう。失つて、初めて……」

「 まだ、間に合います。今回は手遅れなんかではありますん

病院の看板が、車窓から見え始めていた。

病院の入り口にはとても騒がしく、たくさんの人だかりができるいた。

彼女達が玄関前に着くと、一気に大勢の人と目を開けていられない程のフラッシュに囲まれた。

「すみません！通してください！」

目の前に突き出されるマイクやカメラを跳ねて、二人は前進を試みる。

「私達は捜査機関の者です。お願いします。通してください！」

田邊が川上を守るよう、片手で彼女の手を握りながら、人の波を搔き分ける。

「通してくださいー。捜査機関の者ですかー。」

しかし、田邊の声はシャッター音とフラッシュ音で消されていた。

二人はもみくちゃにされながら、

何とかしてそこを通り抜けると、全速力で病院の受付へと駆け寄つた。

「おはようございます。今日またひつた・・・」

「花岡輝は? ビー! 今すぐ答えなさい!」

突然の飛鳥の大声に、受付の看護士の田はよ点と化していた。

「か、患者様との御関係は・・・」

「いいからー早くー」

どん、と両手で受付の窓口を叩く。

「す、すみません。検事、落ち着いて。

私達、検察の者で、花岡さんの件について事情聴取するため参りました」

田邊が飛鳥の胸のピンバッジを無理やり引っ張つて見せた。

「花岡様は、突き当たりの個室でござりますが、今は多分・・・ってお待ちください！」

飛鳥は脇見も振らずに走り出した。

途中で、川上さん、待つてください、と聞こえたような気がしたが、待っている暇はなかつた。

心は一つの思いで一杯になつていた。

もづ、後悔はしたくない。

そんな思いで。

ずっとずっと、車の中で祈り続けていた。

神様、「めんなさい。」

どんなに嫌われたって構わない。

それは自分が素直になれなかつた罰だつて受け入れるから。

だから、だからお願い。

神様、彼に一言だけ伝えさせて・・・。

彼の部屋が見えてきた。

戸口の隣に、「花岡輝」という名札があつた。

「花岡さんーーお願い、死なないで！私まだ・・・」

「どうぞお入り下さい。お姫様。（1）

彼女はドアを開けたと同時に彼女は叫んだ。

開けた瞬間、そこに、沈黙が切つて落とされた。

「え、あ、・・・か、川上さん？」

視界にあるのは、二人の男性。

一人はベッドの上で座っていた。

それも上半身裸姿で。

そして一人はベッドの近くに立ち、上半身裸の方に何かを被せようとしていた。

「・・・あ、今、こいつ浴衣からTシャツに着替えようと・・・」

一瞬の静寂。

焦点の合わない視線が病室を泳ぐ。

1・2・3。

時計の秒針が、数を数えるかのように響き渡る。

「キヤーーーし、失礼しましたあーーー。」

がしゃん、ドアを勢い良く閉める。

「いたあああっ」

「か、川上さん、何して……。指一挟まつてこますよ。ドア開けてー早くー！」

その場は、病院史上、これまでに無いほどの騒然な雰囲気へと化していた。

王太子は、田の前のみすぼらしい女性に向ひて、尋ねた。

。

「私の妻になつてくれませんか」

彼女といつ存在が、美しいといつひとを。

しかし、王太子はあの舞踏会で、既に分かつていた。

光る宝石でもなく、豪華なドレスでもなく、

「ええ。俺が偶然あいつと電話している時に殴られたんで、直ぐに

「良かつたですね、花岡さん、大事に至らなくて」  
田邊と鈴木は、病院の庭のベンチに座つて居た。

駆けつけたんですよ。

だから、早く応急処置が出来て、何とか助かりましたよ。

10分でも遅かつたら、ヤバイ事になっていたかもしだせんがね

彼は胸ポケットから煙草を取り出しかけたが、その手を下ろした。

「・・・犯人達は酔っ払っていたようですね」

「（一）存知なんですか？」

「今日、被疑者の取調べの為に、警察からの調書を読んで、この事を知ったんです」

「・・・そう、ですか」

鈴木がそっぽを向いた。

しばらく一人は何も話さず、ただ黙っていた。

「貴方に言つても意味が無い事は百も承知ですが・・・」

沈黙を破ったのは鈴木の方だった。

「あいつ、輝は良い奴です。

珍しいですよ、今時。あんな格好だから、女にモテるのに、遊びもない真面目過ぎる奴で。

それに、好きな人には凄く臆病で、だけど一途に彼女を想つてて・・・

でも、酷い事を言われても、彼女の悪口を一言も言いやしない・・・

それなのに、どうして・・・

友達思いですね、そう前置きしてから、彼女は答えた。

「・・・『めんなさい。

私が言つても仕方がないませんが、少しだけ彼女を弁護させてください

田邊が空を見上げる。

「一つだけ聞いて欲しいの」

大きな呼氣が、上空へと舞い上がる。

「検事って、大変なのよ」

秋風が一人の間を通り過ぎていく。

一緒に、落ち葉が踊る音も、駆け抜けていく。

「それも女だと、余計にね。

被疑者に馬鹿にされたり、同僚に馬鹿にされたり。

でも検事である以上女だからって、なめられちゃ困るじゃないですか

か

ふう、と大きな溜息が、再び田邊の口から零れ落ちた。

「川上さんは、結構早くに司法試験に合格して、検事になつた。

女性つて、特に検事は中々なりにくいのよ。

まあ、結婚とかあるから全國あちこち転勤せりふる事を考ふると、女性は採用され難いの。

始めの内は、それは大変だったと思つわ・・・。

妬みや、嘲り、散々受けたでしょうね。

でもね、それでも負けないで頑張つて來たの。

そして、そんなある日、彼女は転勤してきた若い検事と、恋に落ち、婚約までした。

でも、男は、結婚の条件として、仕事を止めるよう彼女に要求したわ。

彼女は随分悩んだようだけど、中々仕事を止めなかつたの。

そしたらね、男は他に女を作つて。結局、婚約は破綻になつた

再び、秋の風が通り抜ける。

「だから、極端に臆病なのよ。彼女は、恋愛するの」

「そう、ですか。でも・・・」

「理解しても、うるさいとは思つてない。」

でもね、知つてあげて。

あの子も、本当に凄く良いくらい

丸い顔に、笑いが点る。彼もそれにつられて笑つた。

「コーヒーでも飲みます?」

組んでいた長い足をほぐし、彼が立ち上がる。

「ええ。ホットね。ミルクと砂糖は必須よ

彼は右手を上げて、病院の売店へと向かつた。

「…ひを向いて、お姫様。（2）

「…川上さん？」

あのう、大丈夫ですか？

…まだ、指痛みます？…困ったなあ」

病室に一人が残されて、早10分が過ぎていた。

その間、彼女は何も言わず、ただ泣きじやくつているだけだった。

彼は一生懸命彼女を泣き止ますため、変顔や冗談を言って

〔冗談はいつも寒いと鈴木に馬鹿にされているのだが　はみた

が、

効果は一向に現れなかつた。

「…あの、聞いても良いですか？」

恐る恐る、彼女の顔を覗き込んだ。

彼女は答えることなく、ただ泣いている。

「どうして、ここに、来られたんですか？」

彼のその問い合わせ終わらぬ間に、余計にわーーーーーーーーと彼女の泣き声が大きくなつた。

「あ、『じめんなさい』へ、変な事、聞いちやいましたよね！」

あはは、やつぱり僕は・・・

「駄目なんかじゃないから！」

鼻に掛かつた大声が、狭い病室にこだまする。

「え？」

真っ赤に腫れた目をしながら、彼女は顔をあげた。

「私は・・・。

まだ謝つてないじゃない。

昨日、あんなに酷い事言つといて、謝ろつと今日電話しようと思つていたのに・・・。

それなのに、傷害事件の調査で、貴方の名前・・・。

傷害致死になる可能性もあるとかつて・・・。

私、後悔すると思って、嫌だ・・・。嬉しかったのに・・・。凄く・・・

彼女の頬を流れる涙がその動きを止め、顔が困惑に包まれていく。

「あの、仰つてる意味が良く・・・」

「だからー本当は待つてくれて嬉しかったんですー」

ピタ、と彼女が泣き止んだ。

それと同時に、彼女の顔が赤くなつていぐ。

目を皿のように広げた彼が、彼女の朱に染まつた顔を見つめた。

「あのう、それは、その、つまり、どういう事ですか・・・?」

「え、だ、だから、それは・・・」

彼女は右手で持っていた眼鏡を掛け直そうとしたが、上手く行かない。

「それは・・・?」

「それは・・・」

彼女の顔が、益々赤くなつていぐ。

彼の顔が、彼女との距離を縮めていく。

「そ、それは……。

だから、貴方の、笑顔、とか……？」

あと少しじ。

「笑顔……？」

その吐息が、肌で感じられる。

「……す、素敵なような気がするし。

いや、そんな事じやなくて。

私、心にも無い事を言って、傷つけたから、もう……」

あと少しじ。

「もう……」

「会えなくなつたら、じつよいか、とか思つたらいてもたつても  
いられなくなつて・・・」

頬が持つ熱を、肌で感じられる。

「飛鳥さん」

彼女の口を、その唇に宿す。

「一つだけ、お尋ねします」

包帯が巻かれた手で、短めの彼女の髪を梳いた。

さらり、とそれは指の間を抜けていく。

「ドレスを着て完全に綺麗にしていたシンデレラは、

何故、脆くて脱げ易いガラスの靴を履いていたんだと思いますか?」

「・・・はあ?」

「いいから、答えてください」

「え？えーっと……。魔法使いが、くれたからじゃなくて？」

突拍子で脈絡の無いの質問に、彼女が首を傾げる。

「本当の自分を、残しておく為に。

そして王子は、それを見抜いた上で、シンデレラへの愛を確信した  
んですね」

自分でも信じられないくらいのクサイ台詞を吐いたと思つたが、

吐かれた相手はもつと恥ずかしかつたらしく、さつきよにも熱い体温を、頬で感じる。

「……僕、飛鳥さんの事、好きです。

悪や自らが有する権力に対して秋霜烈日であろうと努める飛鳥さん  
も。

僕の事が心配で取り乱したりしている、弱い飛鳥さんも。

強がつて虚勢張つたりする飛鳥さんも。全部、大好きなんです」

彼女が恥ずかしそうに俯く。

彼は彼女の頸を軽く親指と人差し指でくい、と上げた。

そつと、彼女の瞼が閉じられる。

漆黒の瞳に映るのは、本当の自分をさらけ出す、一人の女性の姿。

いとおしくてたまらないこの感情を、今度がその唇に直接伝えよう。

あと少しじで。

その唇をこの唇で感じられる・・・。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3842m/>

SERENDIPITY～ガラスの靴を履いたお姫様の恋物語～

2010年10月13日08時04分発行